

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 気仙沼市立面瀬小学校
種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中高一貫教育
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()
住所 〒988-0133
宮城県気仙沼市松崎下赤田58番地
E-mail: omo-s14@marble.ocn.ne.jp
Website: http://www.j-miyagi.net/omose-syou/
児童生徒数：男子 189名 女子 171名 合計 360名
児童・生徒の年齢 7歳～12歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

研究主題

人とかがわり自然とふれ合いながら「ふるさと気仙沼」への思いや考えを深め、表現できる児童の育成
～人とのつながり・自然とのつながり・未来とのつながりを重視する言語活動の充実
を図った「地域に根ざした探究型環境学習プログラム」の工夫と改善を通して～

1 主題設定の理由

(1) 社会的な背景より

千年に一度と言われる東日本大震災の発生、地球温暖化が原因と考えられる異常気象やそれに伴う洪水・土石流等の自然災害、思想・生活・歴史・文化等の違いによる人権侵害や国家間の衝突等々、今、我が国も含む世界中の国々がよりよい未来を構築するために解決しなければならない様々な課題（持続不可能な社会）に直面している。

このような背景から、2002年に南アフリカでヨハネスブルグサミットにおいて、日本の市民と政府が、持続可能な開発の実現に必要な教育への取り組みと国際協力を、積極的に推進するよう各国政府に働きかける「国連持続可能な開発のための教育（以下、ESD）の10年（ESDの10年）」を共同提案し、同年12月の第57回国連総会で、2005～2014年までの実施が決議された。さらに、2004年の第59回国連総会では、第57回国連総会で「ESDの10年」の国際的な推進機関として指名されたユネスコが、以下の5つの目的を明記した「ESDの10年国際実施計画案」を発表した。

- 1 持続可能な開発の実現を人類が協力して追い求める中で、教育・学習が中心的な役割を果たすということについて、幅広い理解を得ること。
- 2 ESDに関係する様々な機関・団体・人々の間でネットワークや交流を推進すること。
- 3 あらゆる学習や啓発活動を通じて、持続可能な開発のあり方を考え、その実現を推進するための場や機会を提供すること。
- 4 ESDにおける指導と学習の質を向上すること。
- 5 ESDにおける能力を強化するため、各段階で戦略を策定すること。

このことは、持続可能な社会を構築するために、今後、人と人、人と自然の理想的な環境について、人々が住むそれぞれの地域を基盤とし、それぞれの学校・家庭・地域・関係諸機関がつながりをもって課題を追究・発信していくことと考えた。

※ヨハネスブルグサミット・・・持続可能な開発に関する世界首脳会議

(2) 学習指導要領との関連から

学習指導要領においては、「生きる力」を育むための重点項目として「思考力・判断力・表現力等の育成」や「主体的に学ぶ態度の育成」を挙げており、それらは、ESDで重視している「多面的・総合的なものの見方」や「批判的に考える力」、「進んで行動できる力」等の資質・能力・態度に合致するところである。さらに、そのような資質・能力・態度を身に付けるために、言語活動の充実が示されている。平成20年1月の中教審答申においては、言語活動を充実させるために、以下の6つの例が示された。

- 1 体験から感じ取ったことを表現する。
- 2 事実を正確に理解し伝達する。
- 3 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- 4 情報を分析・評価し、論述する。
- 5 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- 6 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

このことより、ESD を推進し、児童が「生きる力」を身に付けるためには、今後言語活動の一層の充実を図る必要があると考えた。

(3) 学校教育目標の具現化より

東日本大震災（以下、震災）から3年半が経過した今日、気仙沼市復興計画に基づき、面瀬地区でも区画整備や宅地造成、三陸自動車道の整備など震災からの復旧・復興が進んでいる。しかし、未だ仮設住宅から通う児童も多く、学習環境の整備や心のケアが重要課題となっている。

本校では、一昨年度、震災からの復興を果たし、未来の気仙沼のまちづくりを担う人材の育成を見据え、教育目標を「将来を力強く生き抜き、新しい社会と地域を創りゆくために、かしこく、たくましく、思いやりのある児童を育成する」と新設した。震災の影響により、気仙沼も含む被災地では、環境や人権、経済、生活等についての課題が山積しているという状況から、人とかかわり、自然とふれ合いながら、ふるさと気仙沼の未来の姿を考えていくことは、児童にとっても、持続可能な社会の構築を実現するための現実的な重要課題であると考えた。

(4) 昨年までの研究の成果と課題から

本校では、児童の「思考力・判断力・表現力」を育むために、言語活動の充実が重要であると考え、平成22年度から「自ら考え、表現する力をもった児童の育成」に向けて「言語活動の充実を図った生活科・総合的な学習の時間の指導」に取り組んできた。その結果、考えたことを進んで発表したり、聞いたことや調べたことを観察日記や新聞等に詳しく記述したりすることができるようになってきたと思う。しかし、自分の思いや考えの内容については漠然としたものが多いという反省から、昨年度は、「書く活動」を重視した活動の展開を試みた。自分の考えを一層具体化したり、自他の考えを振り返って学びを深めたりする上では効果的な取組であったと考えるが、児童の変容が見えづらいという課題が残った。そこで、今年度は、「人」「自然」「未来」のつながりを重視し、児童が自他の活動や成長を実感できる言語活動の展開に努めるとともに、児童の持続的な学びや日常生活での実践的態度も育成したいと考える。

以上のことから、本主題を設定した。

2 研究目標

人とかかわり自然とふれあいながら「ふるさと気仙沼」への思いや考えを深め、表現できる児童を育成するための学習指導はどうあるべきか、**人とのつながり・自然とのつながり・未来とのつながりを重視する言語活動の充実を図った環境学習プログラムの工夫と改善**を通して明らかにする。

3 研究仮説

人とのつながり・自然とのつながり・未来とのつながりを重視する言語活動の充実を図った環境学習プログラムの工夫と改善において、以下のような手立てを工夫すれば、人とかかわり自然とふれ合いながら「ふるさと気仙沼」への思いや考えを深め、表現できる児童の育成を図ることができると思う。

- (1) 人や自然など地域の環境と十分にふれ合ったり、かかわり合ったりする体験活動をきっかけに言語活動が活発に行われるような追究活動やまとめ・発信を設定する。

体験を単発的な活動に終わらせることなく、体験からまとめの段階までを見通した多様な言語活動と組み合わせ、意図的・計画的・継続的に活動することによって、物事の本質を探って見極めようとする一連の知的営みとなる探究的な活動の改善を図る。具体的には、体験活動の事前・事中・事後において、昨年度取り上げた「書く活動」の重点化を一層図り、「聞く」「話す」等の言語活動と組み合わせながら、活動の各段階(課題の設定、計画立案、体験活動や調べ活動による情報の収集、情報の適切な整理・分析と、既習の知識や経験と関連付けた思考・判断、まとめ・表現、他者との交流と、自分の考えの修正・深化・拡充)における言語活動を効果的・積極的にやっていく。これらの一連の学習段階において、思考力・判断力・表現力を育成するためには、分かったことや気付いたこと、考えたこと、思ったことなどを書き留めながらじっくりと考えたり、活動を振り返って次の追究活動に生かしたり、書きためたメモなどを基に内容やまとめ方について話し合ったり、活動の成果をまとめたり、発表したりすることが必要であると考ええる。

- (2) 各教科(特に国語科)との関連を指導計画に位置付け、言語活動における指導内容の充実と指導効果の高揚を図る。

探求的な学習プログラムを推進するためには、各教科との関連を図ることが必要不可欠であるが、とりわけ、全ての学習の基礎となる国語力の育成が重要である。したがって、国語科を中心とした教科での学習が、生活科や総合的な学習の時間での活動にどう生かされているのか、また、生かすためにはどのような学習が必要なのかを考慮し、効果的な手立てを講じていくことによって、言語活動の充実を図ることができ、児童の思考力・判断力・表現力を育成することにつながると考える。

- (3) 第三者への発信や外部との交流の場を工夫し、言語活動の設定による児童の思考力・判断力・表現力についての変容を客観的に評価できるようにする。

「書く活動」を中心とする多様な言語活動を取り入れることによって、児童がどのように変容したのかを客観的に評価するためには、自分たちが探求してまとめたものを、第三者的な視点で評価していただく必要がある。したがって、発信や交流の場が一方的ではなく、双方向で学び合いができるような活動に発展させたいと考える。

4 研究の構想

基本的に前年度の研究を引き継ぎ深化・発展させるという趣旨から、研究主題を昨年度同様とし、副題については、前年度の「書く活動」の重視と本校のESDのコンセプト「人とつなぐ、自然とつなぐ、未来へとつなぐ」を生かして、「つながりを重視する言語活動の充実」とする。「書く活動」の効果を一層高めるため、教科(特に国語科)の学習との関連させた言語活動の充実を図り、本校の重要課題の1つである「思考力・判断力・表現力」の育成について研究を深めたいと考える。

- (1) 研究主題のとらえ

- ① 「人とかわり自然とふれあいながら「ふるさと気仙沼」への思いや考えを深め、表現できる児童」とは

東日本大震災によって被災したふるさとの復興に向けて努力している人々の姿や、森・川・海の自然環境について、友だちと協力し合いながら探究したことを基にして、「ふるさと気仙沼」の今やこれからについて熟考し、自分の思いや考えを理由や根拠を明らかにしながら、筋道を立てて分かりやすく表現し、相手の立場や伝える目的に応じて意欲的・主体的に発信できる児童と押さえた。

②「人とのつながり・自然とのつながり・未来とのつながりを重視する言語活動」とは

昨年度の重点的な取組「書く活動」を単元を通じた取組の中で十分に生かし、児童が、下記のように人・自然・未来とのつながりを意識しながら、持続的・双方向的に探究活動に取り組もうとする意欲や態度につながる言語活動と押さえた。

人とのつながり	・どんな方と、何のために、どのようにコミュニケーションを図っていくのか
自然とのつながり	・何のために、どんなことを、どのような方法で表現していくのか
未来とのつながり	・誰に、何を、何のために、どのように伝えていくのか

(2) ESD との関連

○構成概念と重視する能力・態度

学年	構成概念		重視する能力・態度		
高	有限性 (限りがある)	責任性 (責任をもって)	批判的に考える力	未来像を予測して計画を立てる力 ※開発・発展 ※創造 ※抑制	多面的・総合的に考える力
中	相互性 (関わり合っている)	連携性 (力を合わせて)	コミュニケーションを行う力	つながりを尊重する態度	
低	多様性 (いろいろある)	公平性 (一人一人大切に)	他者と協力する力	進んで参加する態度	

(3) 生活科・総合的な学習の時間の単元構想について

① 改善の視点

本校では、地域や児童の実態に応じて、活動の内容や実施時期等について随時見直し、一層の工夫や改善に努めている。昨年度の研究実践を踏まえ、今年度は以下の視点で改善を図っていきたいと考える。

ア 地域人材や専門機関との打合せを密に行い、意図的・効果的な活用を図る。
イ 復興の情報等を能動的に受け止め、情報収集や取材を基にした体験活動や地域人材の活用を考える。
ウ 「書く活動」の効果を一層高めるために、教科（特に国語科）との関連を明確にして、書く内容の理解や書き方の技能を身に付ける指導の徹底を図る。

② 学年の構想表

学年	テーマ	単元名	導入	まとめ(言語活動)	ESD
1	人・自然	面瀬の四季	自分たちが住む地域にも、自然やいきものが多い。	・おもせっこまつり(幼稚園・保育所との交流)	多様性 公平性
2		野菜を育てよう	地域の人々は、自然とかわかって生活している。	・野菜収穫祭 ・野菜作り名人への感謝の集い	
3	水辺環境	未来に残そう水辺の生き物たち	面瀬川は多種多様な生き物がすみ環境にある。	・面瀬川の生きものマップづくり	相互性 連携性
4		未来に残そう水辺の環境	社会の発展により面瀬川を取り巻く環境も変化している。	・環境新聞 ・面瀬川の環境保全カード	
5	海の環境 エネルギー 未来都市	水産都市気仙沼 海と共に生きる	震災後も、海と共に生きる志をもって働く人々が身近に存在する。	・フォトブック ・パネルディスカッション	責任性 有限性
6		響け 僕らの声 未来都市気仙沼	震災からの復興には、様々な課題を乗り越えていかなければならない。	・地域の未来予測(ジオラマ製作) ・環境フォーラム	

(4) 目指す児童像

研究主題および研究目標から、目指す児童像を以下のように設定する。

	生活科	総合的な学習の時間	
	低学年	中学年	高学年
	<p>○地域の方々に進んでかわりあったり、身近な植物や生き物の観察やお世話をしたりしながら、地域を支えている人々の存在や身近な自然の良さに気付く。</p> <p>○体験したことや考えたことを絵や文などを使って、素直にできるだけ詳しく文章に書いたり、言葉で発表したりすることができる。</p>	<p>○面瀬川の生き物や水質などの水辺の環境について、進んで調査したり、地域の方々取材したりしながら地域の環境を見つめ、集めた情報を比べたり、分類したりして整理・分析する。</p> <p>○自然と共に生きる気仙沼のよさについて考えたことを、効果的に資料を使って新聞やポスターなどに書き表したり、それらを基にして発信したりすることができる。</p>	<p>○海と共に生きる人々や温暖化を防ぎ自然と共に生きるためのエネルギーの活用について、進んで地域の方々取材したり、自然エネルギーについて調べたりしながら情報を集め、整理・分析する。</p> <p>○情報から、ふるさと気仙沼の今やこれからのあるべき姿についての思いをもち、資料や根拠を示しながら、新聞や報告書などに適切に書き表し、発信することができる。</p>

(5) 「書くこと」と「人とのつながり 自然とのつながり 未来とのつながりを重視した言語活動」で身に付けたい力

	低学年	中学年	高学年
書くこと	<p>○自分の考えを詳しく書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「まず」「次に」「最後に」など、順序を表すつなぎ言葉を使って書く。 ・誰が何をしたのかがはっきり分かるように書く。 	<p>○自分の考えを整理して書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「しかし」「だから」「なぜなら」など、接続語を使って筋道立てて書く。 ・中心をはっきりさせ、理由や事例を挙げて書く。 ・まとまりを意識して段落を付けて書く。 	<p>○自分の考えの根拠を明確にして書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「このように」「つまり」など、まとめる言葉を使って書く。 ・事実と感想、意見などを区別して書く。

人	<ul style="list-style-type: none"> 相手の教えをしっかりと聞く。 自分の思いや考えを、最後まではっきり話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の思いや考えをしっかりと聞く。 相手に、自分の思いや考えがよく伝わるように話したり、発信したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 個々の思いや考えを、互いにしっかりと聞き合ったり、話し合ったりする。 発信する相手と交流し合ったり評価を生かしたりする。
自然	<ul style="list-style-type: none"> 自然のよさや不思議さなどに興味をもって見付けたり気付いたりしたことを積極的に書いたり、発表したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自然のよさや不思議さなどを目的をしっかりとって調べ、足りないことやもっと調べたいことを調べて直して、積極的に相手に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な自然と他の地域の自然を比べたり、分かったことを基に、類似点や相違点などを話し合ったりする。
未来	<ul style="list-style-type: none"> 日常的な生活や、未来への夢・希望などについて、思いや考えを書いたり、発表したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な自然の現状についての理解を深め、今後の自分のかかわりについての思いや考えを述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な環境のあり方について深く考え、友だちや地域などに広く、実践的に提案する。

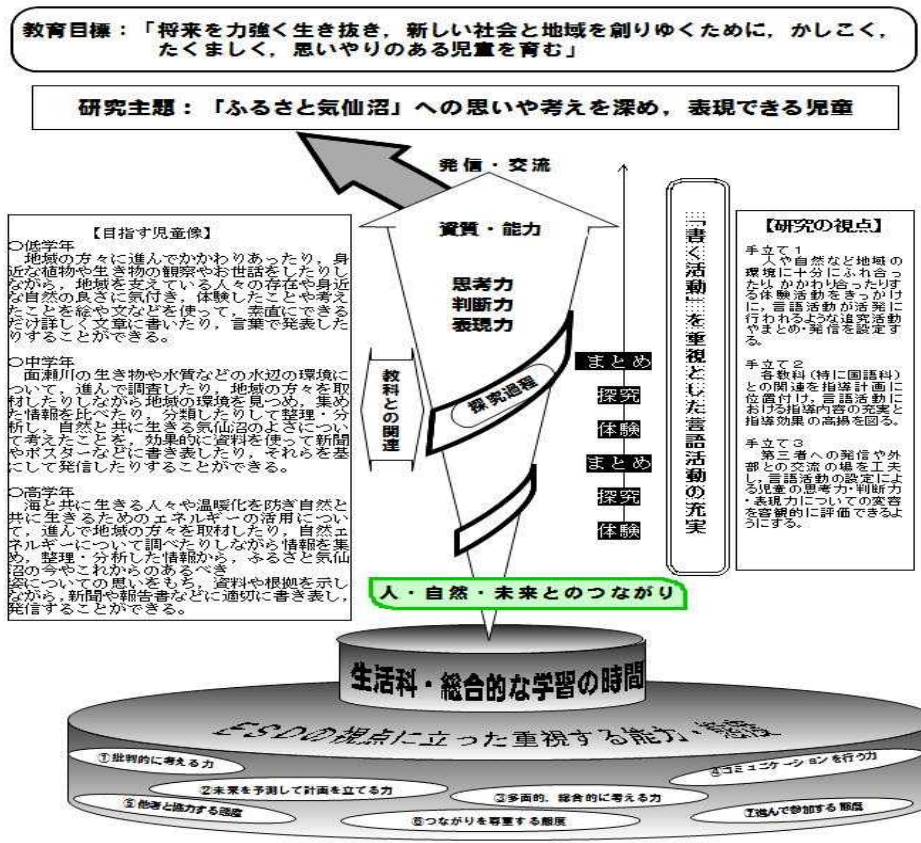
5 研究の主な内容見直しや改善を図る。

- (1) 生活科・総合的な学習の時間の単元構想や指導過程の
- (2) 「書く活動」の効果が高めるため、単元に対する児童の課題意識や「書くこと」への目的意識を高める指導を工夫する。
- (3) 地域人材や専門機関との連携を深め、授業への効果的な活用を図る。
- (4) 児童の活動内容を外部に発信し、客観的な評価を得る。
- (5) 目標を達成するための手立てを工夫し、児童の変容を客観的に見取る。

6 研究の主な方法

- (1) 各学年毎に研究授業を実施し、目標を達成するための手立ての効果や、児童の変容等について検証する。
- (2) 「書く活動」の指導計画や指導過程への位置付けを考慮し、「何を、どう書かせるか」等、書かせる内容や方法について研究授業や研修会等で提案する。
- (3) 市の復興情報等を収集し、教材化や人材の活用を図る。
- (4) ホームページの再開設やスカイプ等 IT 機器を活用した外部への発信・交流を試み、客観的な評価を得る手段として活用する。

7 研究のイメージ図



8 主な実践から

(1) 地域人材・大学・専門機関等との連携と活用

児童に多様な見方や考え方を身に付けさせるために、本校では、地域の自然や産業等に精通している地域人材や、宮城教育大学、東北電力、宮城県北部鯉鮒協同組合等との一層の連携を図ってきた。昨年度は新たに、震災後の未来の面瀬を考えようという視点で、神戸大学や中央大学との連携が生まれた。また、被災してなお、地域の自然や水産業の復活に努力されている地域の方々を迎えての学習は、児童にとって、震災を乗り越え、海や川と共に地域に根差して、力強く生きる生き方（生き様）に、直接触れることができるよい機会となった。

(3) 言語活動を支える「書く活動」

本校で、「書く活動」を重視している理由は、これまでの活動の中で、児童が記述した意見や感想に「～したい」「～をがんばりたい」など、漠然とした観念的な内容が多かったという反省があったからである。それは、「情報を分析・評価し、論述する」活動や「互いの考えを伝え合ったり、議論したりすることによって、発展的に高め合う」活動が不足しているからだと考えた。また、設定した課題が、児童にとって切実なものになっていなかったことや、「書くこと」の基礎基本が十分に身に付いていないことなども原因となっていると考えた。そこで、各学年の生活科・総合的な学習の時間や国語科の学習指導計画や指導過程の中に、「書く活動」を明確に位置付け、「何を」「どのように」書かせるかを意識して、指導の徹底を図った。具体的には、導入・展開・まとめの各段階において、学習のねらいや内容に応じて、課題に対する予想や追究活動のめあて、取材メモやその整理・分析、発表原稿や新聞・レポートなどを効果的に導入し、「書くこと」によって、児童が思考し、よさや見直すべき点を見出し、新聞やフォトブック、ジオラマ等で表現したり、ワークショップやパネルディスカッションなどで発信したりする活動場面を設定した。

(3) 伝える喜びを味わわせる表現活動

研究実践のまとめとして、各学年毎に世話になった地域や関係機関の方々・保護者を招き、お祭りや発表会、感謝の集い、ワークショップなどを実施したり、友だちや地域・保護者に向けた新聞やポスター、フォトブックを発行したり、自分たちが考えた未来の地域への思いや願いをジオラマで表したりするなど、児童一人一人の活動の跡が見える表現活動を設定した。

昨年度、6学年では、神戸大学の学生や地域のまちづくり協議会のみなさんと一緒に製作したジオラマに、これまで積み上げてきた知識や体験をもとに、各々のテーマに沿って、面瀬の未来予想図を創り上げた。（写真8）自分たちの活動が、長期間で積み上げたものであればあるほど、その活動によって導き出した自分たちの考えや主張が練り上げ・吟味され、伝える喜びやその後の充実感は大いいものであると考える。児童は、未来を意識しながら、自分たちが住む地域の未来のために「何を」「どのように」考え、実践していったらいいのか、夢と希望を広げながら、いきいきと話し合ったり、発表したりすることができた。

4 今後の課題

- ① 地域に根ざした探究型環境学習プログラムを整理し、外部との積極的な発信・交流の場を創る。
- ② 地域人材・関係諸機関との連携を確立させ、次年度以降の活動の継続的な実践を保障する。
- ③ 学校・保護者・地域が協力し合い、協働で児童の学びを支援する体制づくりに努める。

5 終わりに

「ESDの10年」が経過した今日、国内だけではなく世界的な取組の動向を踏まえ、児童一人一人が人として、社会の一員としてどう生きていくか考え、進むべき道を見出

写真資料

(1) 地域人材・大学・専門機関等との連携と活用



(写真1) 5学年「海草と海の環境」



(写真2) 4学年「面瀬川の昔と今」

(2) 言語活動を支える「書く活動」

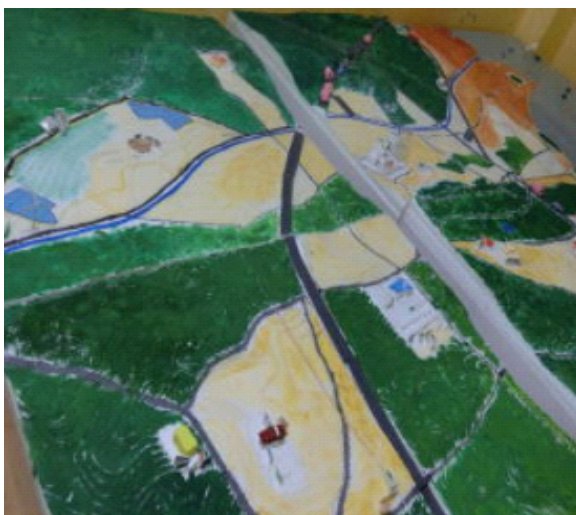


(写真3 新聞づくり講座)



(写真4 新聞編集会議)

(3) 伝える喜びを味わわせる表現活動



(写真5 地域のジオラマ)



(神戸大学生とのワークショップ)